

神様にささげ尽くした人生

申命記34章1～12節
2021年5月16日
松田 基子 師

今日、百歳以上の方は、珍しくはありませんが、どんなに永く生きたとしても、この世界に生まれて来た以上、必ず死を迎え、この世を去って行かなければなりません。コロナ禍は、わたし達にとって、大きな試練ですが、自分の死について考える時となりました。死を考える時、どういう死に方をするかを考えない訳にはいきません。しかし、それは、どういう生き方をするかが、問われていることです。

今朝の聖書箇所、申命記34章は、モーセの死について語られている箇所です。神様に愛され、イスラエルの出エジプトの指導者に立てられて、心血を注ぎ、その全生涯を、神様とイスラエルに献げ尽くしたモーセも、死ななければなりません。人生にとって、最大最後の大事な仕事は、

『自分の死を、如何に死んで行くか』
という事だと言われています。

その点について、モーセの死は、神様への従順であり、神様の御手を信じ切って、御手に委ねた死でありました。わたし達が見倣うべき死に様であったと、言えるでしょう。モーセの生涯は40年毎に区切られています。40歳までは、後々の出エジプトの指導者となるべく、王女に拾われて、エジプト最高の学問、教養、武術、戦術、指導力などを身に付けることが出来ました。自分の思いで、同胞を助けたいと思った行動は、挫折し、次の40年間は、ミディアンの荒れ野に逃れて、大自然の中で、牧羊者となり、この世の力を捨て、自然と動物相手に、忍耐を学び、神様の声を聞く者となりました。

80歳にして、エジプト王、ファラオの前に立ち、イスラエル人の、奴隷からの解放を求めました。ファラオとの交渉は、命がけのものでありましたが、モーセはファラオを恐れることなく、大胆に

神様からの命令を語りました。ファラオは神様からの災いの奇跡に遭うと、イスラエルの解放を約束しますが、すぐにまた、翻してしまいます。モーセはそんなファラオを相手に、少しも引き下がることなく、音を上げることなく、ファラオと交渉を続けました。10番目の災いである、ファラオの初子から、牢屋にいる捕虜の初子、また、家畜の初子まで、その命が取られた災いに対しては、流石のファラオも、自分の命の危険を感じて、イスラエルの出エジプトを追い立てました。

奴隷の身から自由になったイスラエルは、さぞかし神様と、モーセに感謝した事だろうと、想像するのですが、それは葦の海まで追いかけてきたエジプト軍が、海の藻屑となった時まででありました。その時、女性達は小太鼓を叩いて、神様の御業を誉め讃えました。モーセは、イスラエルの全会衆に、出エジプト記15章26節で、
「もしあなたが、あなたの神、主の声に必ず聞き従い、彼の目にかなう正しいことを行い、彼の命令に耳を傾け、すべての掟を守るならば、わたしがエジプト人に下した病をあなたに下さない。わたしは、あなたをいやす主である。」

と主が言っておられることを教え、主に従う事を命じました。

しかし、困難な荒れ野の旅路に入るや、出エジプトしてきたこの第一世代は、置かれた環境に神様の助けと守りを、信じる事が出来ないで、指導者モーセに向かって、ことごとく不平不満を言い、呟きました。神様はそのようなイスラエル人の余りの不信仰、身勝手さに怒りを覚えられて、モーセに対して、

「わたしは彼らを滅ぼし尽くして、あなたを大いなる国民とする」

と言われたのですが。モーセは民の敗れ口に立って、神様をなだめ、民の幸せを願って、最後まで民を執り成しました。

モーセにとって、荒れ野の40年は、民の不平不満、呟きに悩まされながらも、民を愛し、民を神様の御心に導く事だけに、全力を尽くしました。

神様の宣言通り、第一世代は、ヨシユアとカレブを除いて皆、自分が言った言葉の通りに、荒れ野で死に絶えてしまいました。その間、モーセは、第二世代を、厳しい荒れ野の環境の下で、
「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる。」つまり、肉の欲求に支配されて生きるのではなく、人間は、神様の御心、ご命令を聞いて、その御言葉に従って生きる所に、人間の本分があり、人の真の幸せがあることを訓練し、教え導きました。

出エジプトから40年後、モーセは、イスラエルの民を約束の地、カナンの手前、ヨルダン川をはさんだ、モアブの平野まで導いて来ました。モーセ自身、自分の使命が、そこ迄である事を示されていました。申命記1章37節で、

「主は、あなたたちのゆえにわたしに対しても激しく憤って言われた。

『あなたもそこに入ることはできない。』

とあり、申命記4章21節でも、

「主は、あなたたちのゆえにわたしに対して怒り、わたしがヨルダン川を渡ることも、あなた
の神、主から、あなたに嗣業として与えられる
良い土地に入ることも決してないと誓われ
た。」

と言っています。

わたし達は、モーセが神様に一途に従い、頑なな民を決して見捨てず、全てを献げて、イスラエルの民を、神様の約束の地の手前まで導いて来たその苦勞を思っ

『どうして神様は、モーセを約束の地に入れて下さらないのだろうか』

と思います。しかし、そこには神様の深い御心と、モーセなるが故に、その御心を受け入れて、

『良しとしていく信仰』

があったのでした。

モーセは、モアブの平野で、イスラエルの民にもう一度律法を語り聞かせました。

そして、申命記32章45節で、

「モーセは全イスラエルにこれらの言葉を全

て語り終えてから、こう言った。

『あなたたちは、今日わたしがあなたたち
に対して証言するすべて言葉を心に留め、
子供たちに命じて、この律法の言葉をす
べて忠実に守らせなさい。それは、あな
たたちにとって決してむなしい言葉ではな
く、あなたたちの命である。この言葉に
よって、あなたたちはヨルダン川を渡って
得る土地で長く生きる事ができる。』

と教えています。

モーセは言うべき事を語り終えますと、
32章48節で、

「その同じ日に、主はモーセに
仰せになった。

『エリコの向かいにあるモアブ領のアバリム
山地のネボ山に登り、わたしがイスラエルの
人々に所有地として与えるカナンの土地を
見渡しなさい。あなたは登っていくその山
で死に、先祖の列に加えられる。』

との御声を聞きました。

モーセはそこで、最後のさいごに33章で、
イスラエルの全部族を祝福しています。
その内、シメオンは後代ユダ族に吸収されて
行ったために、ここには11部族の名が記されて
います。そのことから、この部分は、後代の
加筆とされています。しかし、モーセが最後の
さいごに願ったことは、全部族の祝福に他なりま
せませんでした。

34章1節から、愈々(いよいよ)、モーセの最後
が記されています。モーセはモアブの平野か
ら、ネボ山、即ちエリコの向かいにあるピスガの
山頂に登ったのでした。ピスガ山頂は、海拔約
700メートルぐらいです。

「主は、モーセに、すべての土地が、
見渡せるようにされた。」

とあります。聖書にはカナン全域が記されてい
ますが、西の海と言うのは、地中海のことで、ネ
ボ山からは見える距離にはありません。そこは
見る事は出来ませんが、第二世代が入って行く
約束の土地を、神様は見せて下さいました。

そして、4節に、

「主は、モーセに言われた。

『これがあなたの子孫に与えるとわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である。わたしはあなたがそれを自分の目で見るとした。あなたはしかし、そこに渡っていくことは出来ない。』

と言われました。神様がアブラハムに約束されてから、約700年経っています。その間神様は約束をお忘れになる事はありませんでした。人間的には、エジプトの奴隷として、空の星のように、大地の砂粒のように数を増した民が、先祖の土地に帰って来ることなど、人間の力では不可能なことです。不可能を可能とされるのが、神様ですが、それは決して人間の都合に合わされる事ではありません。その一つは、人間の地上の命は、限られているという事です。

それは、

『人間は、人間に頼ってはならない。』

ということです。モーセがどんなに優れた指導者であっても、モーセに依存するのではなくて、一人ひとりが神の言葉に賭けて、従って行かなければなりません。神様はモーセをお取りになりました。8節に、

「主の僕モーセは、主の命令によってモアブの地で死んだ。主はモーセをベト・ペオルの近くのモアブの地にある谷に葬られたが、今日に至るまで、だれも彼が葬られた場所を知らない。」

とあります。

全てが、神様の御手の中で、神様御自身が誰よりもモーセを愛し、モーセを身許に引き寄せられました。モーセは死ぬ前に、神様の憐れみによって、第二世代が入って行く約束の地をピスガから眺めることが出来ました。どんなに嬉しかった事でしょう。彼は誰よりも神様の真実と、愛の御手を信じていました。モーセは申命記33章で、民への祝福を語っていますが、33章27節には、口語訳で、

「とこしえにいます神は、あなたのすみかであり、下には永遠の腕がある。」

と言っています。モーセは、神様の絶対的な守りを信じて、自分自身もまた、イスラエルの民も、神様に委ねることができました。

だれも皆、死を迎え、この世界を去って行かなければなりません。しかし、そこで、自分自身と、残して行く、愛する者達を、永遠の腕で支えてくださる神様に、委ねることが出来る事は、何と幸いな事でしょう。34章7節には、

「モーセは死んだとき百二十歳であったが、目はかすまず、活力もうせてはいなかった。」と記されています。

神様との交わりに生き続けた、モーセの生き生きとした姿が、想像されます。モーセの死は、イスラエルの民にとっては大きな悲しみでした。8節に、

「イスラエルの人々はモアブの平野で30日の間、モーセを悼んで泣き、モーセのために喪に服して、その期間は終わった。」

とあります。人に頼るのではなくて、神様に頼る、それはモーセ自身が、残されたイスラエルに、一番望んでいたことでした。神様の御心は何でしょうか。目的に向かって前進する事です。そのための指導者として、神様はモーセの従者ヨシュアをお立てになりました。

9節に、

「ヌンの子ヨシュアは知恵の霊に満ちていた。モーセが彼の上に手を置いたからである。」

とあります。つまり、モーセ自身が指導者の権威をヨシュアに委譲して、按手をしたのでした。イスラエルの人々も、ヨシュアがモーセの従者として神様の御心を理解し、実行できる、神様からの力を得ていることを認めました。イスラエルの民は、モーセに従ったように、ヨシュアにも従いました。

10節には、

「イスラエルには、再びモーセのような預言者は現れなかった。主が顔と顔を合わせて、彼を選び出された。」

と記されています。つまり、神様はモーセに特

別な愛顧を示して、ご自身の栄光を彼の前に表されました。モーセが神様との交わりから帰って来ると、その顔の肌が光りを放っていた、とあります。モーセは、神様の御心をより深く受け取る事が出来た人でした。

神様はモーセを通して、何をなされたかということが、11節に記されています。

「彼をエジプトの国に遣わして、ファラオとその全ての家臣および全土に対してあらゆるしるしと奇跡を行わせるためであり、また、モーセが全イスラエルの目の前で、あらゆる力ある業とあらゆる大いなる恐るべき出来事を示すためであった。」

とあります。神様はモーセを用いて、イスラエルをエジプトの奴隷から解放するために、あらゆる徴(しるし)と奇跡、あらゆる力ある業と大いなる恐るべき出来事を起こされました。それは先祖に誓い、ご自身の民に選ばれたイスラエルを、奴隷から解放して、ご自身に仕える民にするためでありましたが、その先には、人類を罪の滅びから救い出す神様のご計画が指向されていました。モーセは人類の歴史の中で、人類を罪の奴隷から救って下さるイエス・キリストの予めの型とされています。

モーセは、出エジプトでの最大の働きをしたにも拘わらず、民の罪に連座して、モアブの谷で死ななければなりませんでした。モーセ自身どんなに執り成しの祈りを献げても、人間である以上、イスラエルの罪を贖う事は出来ません。モーセは、神様の御心を知らされていました。申命記18章15節で、

「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない。」

と命じています。モーセ自身そのお方を望み見て、民の敗れ口に立って、民の救いのために神様に執り成し、その身を献げ尽くした人生を送りました。わたし達の人生も、神様に献げ用いられてこそ、意味があります。人生の価値は神様がお決めになります。それは御言葉に

従って、如何にイエス・キリストを指し示して、生きるかです。人生は矢の如く飛び去り、あっという間に死を迎えなければなりません。神様の永遠の御腕を信じ、わたし達を永遠の滅びから救って下さった、イエス・キリストを信じ、わたし達もイエス・キリストを指し示す人生を追い求めて、神様に献げ尽くす人生を、全う出来るように、祈り求めて行こうではありませんか。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様
モーセの生涯とその死から、神様と同胞に
仕え尽くした人生を学びました。

イエス様は私達を罪の奴隷から救うため
十字架に架かり、贖って下さり、神の子の
身分まで与えて下さいました。

わたし達を、そのご愛に答えて
神様に聴き従い、イエス・キリストを指し示す
生涯を送る者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。